

特色ある共同利用・共同研究拠点 期末評価結果

大学名	文化学園大学	研究分野	生活科学－衣・住生活学（服飾文化）
拠点名	服飾文化共同研究拠点		
学長名	濱田 勝宏		
拠点代表者	濱田 勝宏		

1. 拠点の概要 ※期末評価報告書より転記

[拠点の目的]

服飾文化共同研究拠点は、平成24年度までの拠点整備事業によって、所蔵する服飾文化研究資料を更に充実させ、服飾関連研究者に開放することによって、170人の研究員が44件の分野横断的な共同研究を推進し、服飾文化に関わる研究者のコミュニティを形成し、研究成果を蓄積し、これをWeb上に公開して国内外に発信してきた。また、服飾文化の研究者及び研究資料の情報をデータベース化してその利用を公開し、服飾文化に関心のある者の便宜を図ってきた。

これを受けて、今後も、共同利用・共同研究の成果の蓄積を研究者にフィードバックし、また、服飾文化研究資料の開放等を継続して行うことで、既に形成された研究者コミュニティの活動を支援するとともに、服飾文化に関心のある研究者コミュニティの拡充と若手研究者の掘り起こしを図ろうとするものである。

これまでの共同研究課題44件のうち、「きもの」に関する研究が13件あった成果に鑑みて、和装の文化的側面から現代ファッションへの応用にわたる研究を一つの重点分野として共同研究・共同利用を促進しようとするものである。

服飾文化研究に関わる成果は、服飾文化に関わる学際領域の研究者に対してグローバルに発信し、日本の服飾文化研究の世界的な浸透を図ろうとするものである。

服飾文化の共同研究促進と研究情報発信のグローバルな展開により、服飾文化の研究と情報発信の我が国における拠点としての活動の充実を目指すものである。

[拠点における成果及び目的の達成状況]

服飾文化研究資料の充実によって、分野横断的な共同研究が更に活発になっている。研究資料は、主として図書館、服飾博物館、ファッションリソースセンターに所蔵されているが、これらの開放に努めるとともに、共同利用を中心とした共同研究を研究者コミュニティ間で可能にしている。加えて、服飾文化研究を志す若手研究者から申請があり、拠点の共同研究者として採用している。

このような和装文化研究への関心の高まりに対応するために和装文化研究所を開設し、和装文化研究を本拠点の特色のひとつとなるよう努めている。文化庁の「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」に武蔵野美術大学、京都工芸繊維大学とともに採択（平成27年度～）されたことは、この分野の研究に拍車をかけるものとなり、和装文化研究所の活動を活性化させる結果をもたらした。その成果は、流出・消失する恐れのある貴重な服飾文化に関わる資料を保存・継承する活動につながり、全国に散在する服飾文化のネットワークの構築と研究者コミュニティへ貢献するものとなった。これらの成果を踏まえて、今後もこの事業を継続していく。

一方、科研費による「越境する現代日本ファッションに関する基盤研究（平成26～28年度）」、それを基にした「越境するファッションの理論構築と国際協働の推進（平成29～31年度）」では、服飾文化研究のグローバル化・学際化を伸展させており、日本の服飾文化研究の国際的浸透において成果をあげている。

これら服飾文化研究の成果は、IFFTI（国際ファッション工科大学連盟）の国際会議・年次総会、日本感性工学会、繊維学会、さまざまなセミナー・シンポジウムなどの場で発表されている。

2. 評価結果

(評価区分)

C : 拠点としての活動が十分とは言えず、認定の基準に適合していない状況にある可能性がある」と判断される。

(評価コメント)

当該拠点は、服飾文化の共同研究の促進と研究情報発信のグローバルな展開により、服飾文化の研究と情報発信の充実を目的としているものの、拠点としての活動は十分とは言えず、認定の基準に適合していない可能性がある。

具体的には、中間評価における指摘事項に関連して、外部資金を獲得し、服飾資料の共同利用環境の充実に取り組んでいることは一定の評価はできるものの、公募型の共同研究については実施件数が低調であり、学内の研究者が代表となるなど、制度の趣旨である研究者コミュニティに開かれた運営状況になっていない状況になっている。

従って、認定の更新を行うことは適当ではないと判断されるものの、当該拠点において収集された資料や人的ネットワーク等が、引き続き、当該研究分野の発展に役立てられていくことを望みたい。